

# 『農福一体のソーシャルファーム ～埼玉福興の取り組みから～』

新井 利昌 著

農林水産政策研究所 コンサルティングフェロー 朝倉勇一郎



『農福一体のソーシャルファーム  
～埼玉福興の取り組みから～』  
著者／新井利昌  
出版年／2017年  
発行所／創森社

ソーシャルファーム (Social Firm) とは、社会的企業を意味し、通常の労働市場では仕事が見つかりにくい人 (障害者や触法者、ニート、虐待被害者、高齢者等) のために、通常のビジネス的手法により仕事を生み出し、支援付き雇用の機会を提供することに重きを置いたビジネスを行う企業、と本書では表現されています。

今回御紹介する著書は、19歳で突然、知的障害者とともに暮らす生活寮を始めることとなった著者が、障害者とともに生きていく中でソーシャルファームという概念にたどり着き、その実現に向けて取り組む中で農業に出会い、農福連携を行い、更に一歩踏み込んで農福一体となってソーシャルファームを運営するまでの、その歩みと実践の記録を紹介したものです。

そのため、本書ではソーシャルファームや農福連携の取組の比較、分析や、上手く運営するための技術論等の研究的要素は中心ではありませんが、著者が24年間、障害者と人生を共に過ごすことで学んだ「人間として大事なこと」が語られます。

まず、どんな人にも居場所が必要だということです。その信念から、著者の運営する埼玉福興グループでは、受け入れる人を選ばない、選んでいては福祉ではないと考えています。これまで、凶暴で福祉施設や介護施設で受け入れられない方、重複障害で区分できない方、福祉制度の狭間でどこにも行くところがない方などを受け入れています。たとえ働かない、働けなくても、居場所があることが重要です。

次に、生活が大事だということです。着るもの、寝る場所、食べものが保証された安心して暮らせる生活の場があることが、福祉で一番大事なことだと考えています。

最後に、働く幸せをもたらすということです。働くことは、お金を稼ぎ、経済的自立を可能にするこ

と以外に、社会とつながり、孤立を防ぐ役割があり、人間の幸せも得ることができると考えています。そのため、埼玉福興グループでは、障害があっても労働の主体となって働くことがテーマとなっています。

この「居場所」、「生活」、「働く」をキーワードに本書を読むと、埼玉福興グループがこれらの信念に基づいてソーシャルファームとして発展してきたことがよく分かります。例えば、障害者等の居場所と生活を生涯にわたって支えるため、生活寮から始まり、グループホームや加齢の早い障害者のための介護施設、相談支援事業所、放課後等デイサービスまで展開を広げています。また、どんな人でも受け入れており「働ける人」を選べない埼玉福興グループが、一人ひとりに合わせた働ける場を作り、働く幸せをもたらすために、農業を選択しました。安定生産、安定収入が見込め、作業が分解できて重度の障害者でもできる仕事を作れる水耕栽培、開放的な空間で運動量も多く、障害者の情緒安定や健康増進にも寄与する露地栽培、そして、持続可能な新たな農業の仕組みを作り、終生の仕事を作り出してスローライフを可能にするという最終的な理想に向かってオリーブ栽培を展開していきます。

埼玉福興グループのオリーブは、今や世界のオリーブオイルコンテストでの金賞を受賞し、ローマ法王へ献上したお菓子やお茶にその葉が使用されるなど、世界的な存在に成長していますが、まだグループ内の売上高構成比では僅か1%です。しかし、本書で語られる様々なアイデアの実践や多様な人々とのつながりは、数千年生きるというオリーブの樹とともに、いつか、彼らの理想の世界が実現することを十分に期待させる内容になっています。

埼玉福興グループのオリーブは、今や世界のオリーブオイルコンテストでの金賞を受賞し、ローマ法王へ献上したお菓子やお茶にその葉が使用されるなど、世界的な存在に成長していますが、まだグループ内の売上高構成比では僅か1%です。しかし、本書で語られる様々なアイデアの実践や多様な人々とのつながりは、数千年生きるというオリーブの樹とともに、いつか、彼らの理想の世界が実現することを十分に期待させる内容になっています。